

10月の飼料作物栽培行事

三 秋 尚

まえがき

今月から月々の飼料作物栽培行事について、その要点を書きとめ皆さんの実務の御参考にして頂きたいと考え、編集の阿部さんからの御使命もあって、筆を起すことにしました。ただ前もって御了解願っておきたいのは、県下のあらゆる地方に向けた記事にはなり得ないし、複雑な生産の仕組みの農家にとっては靴の上から搔くが如き場合が多いということです。

今年の初めから連続講座風に飼料作物の栽培についてペチャクチャと書き記しておりますが、これは時々休暇を頂くこともあり、またその月々の行事に縁遠い記事が多いので、この栽培行事で補いたいとも思っている次第です。

とにかくよろしく願います。

10月の行事

甘藷の藪と蔓の両面利用

甘藷の利用状況をみますと、降霜前に蔓を刈取り一斉に藪の掘取りをするのが普通のようにです。処が蔓の方は乾燥したりサイレージに用うるのであればよいのですが、仲々思う様な利用が行われていません。そこで一つこの問題で考えてみましょう。

まず藪なり蔓ほどの程度の飼料価があるかということ。

第1表でその飼料価をみますと、イモの場合は主として澱粉質からなっていて、家畜の体の中でエネルギーの発生に利用されます。従ってエネルギー源としての価値をトウモロコシや大麦と比較しますと殆んど優劣がありません。ツルの場合はエネルギー源としてだけではなく、蛋白質源としてもかなり重要で麩と殆んど差がなく或いはマメ科牧草に比較しても遜色がありません。

さて10月の月は地方によって事情がちがいますがそろそろ夏の青刈作物が欠乏してくる頃です。少しでも食いのばしをすることが大切です。従って若しも甘藷蔓がこの頃に刈取りうるものならば、言葉をかえまして藪の収量に甚しい影響がないとすれば秋の青草端境期に好適の飼料作物となります。県の南部地方で始められたツル取甘藷の様にツルを刈取るのだ

が、藪の収量も大いに生産しようというのがこのイモとツルの両面利用なのです。

皆さんは経験から御存知でしょうが、甘藷蔓は9月初旬頃気候がようやく冷涼となるころから急激に繁茂して、9月下旬から10月初旬に収量をもっとも多く、初霜のころには収量は急激に少なくなります。ところで甘藷は8月下旬から肥大が始まり、ツルよりややおくられて9月下旬頃から著しく肥大し、収量はツルとほとんど同じ位になってその後掘り取り期までは少しずつ肥大してゆきます。(第1図)

この様にイモとツルの生育相に多少の時期的なズレがありますことは藪蔓の刈取りが藪の肥大にある程度の悪影響があることがうかがえるわけです。

例えば旧畜産試験場(現農業技術研究所)で試験した成績によれば8月中のツルの刈取は差程イモの収量に影響がありませんが、9月中下旬の刈取では3-4割の減収となっています。

しかしながらこの頃の刈取では10a当り3,000~4,000kgのツルの生産がありますので考え方によっては、ツルの刈取利用は大いにすすめられる方法であると思います。この場合1株のツルを全部刈取らずに3/1とか2/1とか残しておけばそれだけイモへの悪影響が軽減されます。第2図を御覧下さい。

マメ科草の少ないこの頃に甘藷蔓を配合して給与することは蛋白質飼料の節約となります。

次に甘藷蔓は霜にあいますと飼料価が減少しますので降霜前までに利用するように心掛けて頂きたいものです。

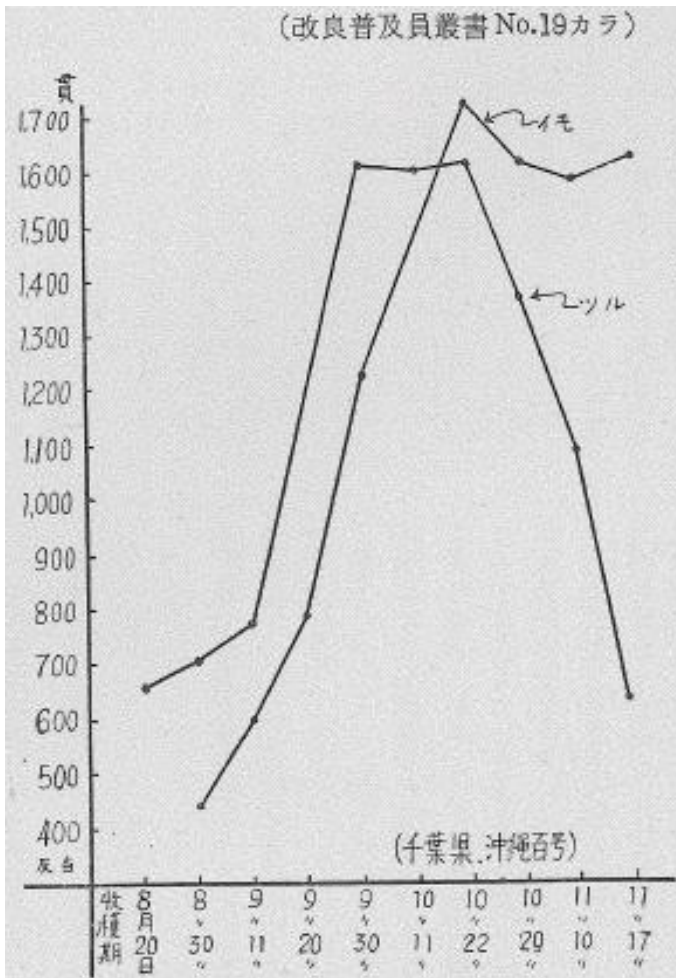
第1表 イモズル(イモ)と他の飼料の飼料価比較

品 名	水 分	可消化 粗蛋白質	可消化 養分総量
サツマイモズル(掘取適期)	89.9	1.1	7.7
サ ツ マ イ モ(生)	69.8	0.9	25.8
サツマイモズル(乾)	12.0	12.6	64.8
サ ツ マ イ モ(乾)	9.3	2.6	74.9
ト ウ モ ロ コ シ	13.7	6.1	77.9
大 麦	14.3	8.8	71.3
レッドクローバー(開花期)	80.0	1.7	11.6
レッドクローバー(乾)	12.0	15.2	60.0
青刈トウモロコシ(出穂期)	85.0	1.0	19.7
フ ス マ	13.5	12.6	63.7

註 改良普及員叢書 No.29, から

岡山畜産便り1959.10

第1図 甘藷とイモとツルの変化



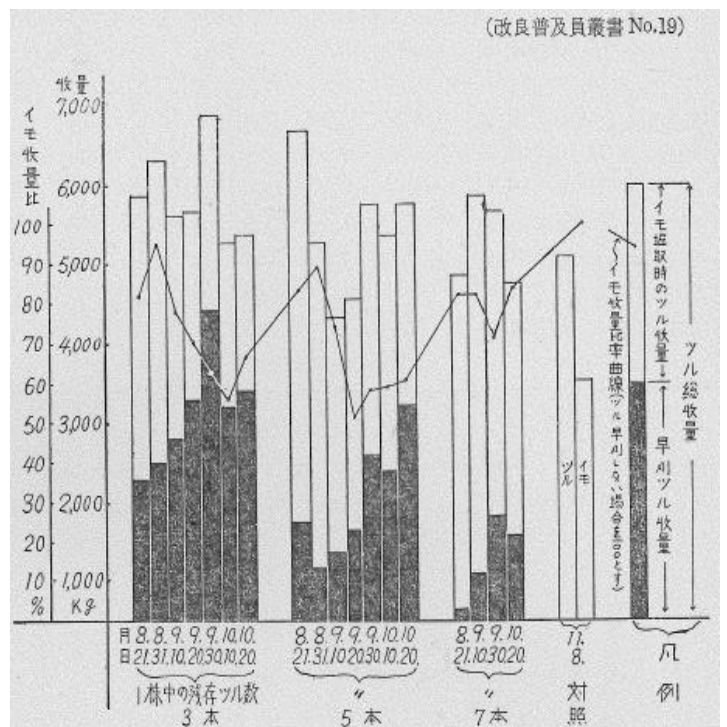
もっとも、燕麦の中播は津山地方で10月に入って播種しますと稲刈取後寒さのために枯死株が目立ってよい成績が得られないようです。この点イタリアンライグラスは10月中旬播でも相当の成績があがります。

また乾田では燕麦、ベッチの混播、湿田(排水可能田)にはイタリアンライグラス、レンゲの混播が適しております。

まずイタリアンライグラスとレンゲの混播について、県農試の田中技師が実施した成績によれば10月10日にイタリアンライグラス3升レンゲ1升を散播して5月中旬と6月中旬の2回に刈取り10a当3,600kg位の収量をあげています。イタリアンライグラスとレンゲの播種量は本県の耕種基準ではイタリアンライグラス1kg(2升)、レンゲ2kg(1.5升)となっておりますが土地条件その他によって可成りの差がありますので注意して下さい。

燕麦とベッチ(コモン種)については県南部では燕麦3.5~4kg、ベッチ3~4kgが1例としてあげられましょう。これ等の中播された作物には、稲刈後に硫酸20~30kg、過石30~40kg、塩化20kg程度を基肥として施用します。

第2図 ツルの早刈によるツルの収量とイモの収量 (10a当)



水稲のイネ間中播の燕麦イタリアンライグラス等の播種

最近水稲の栽培型が色々取りあげられ、早期稲、早植稲、普通稲、晩期稲とその栽培時期がさまざま、このため飼料作物の作付に変化があり水田での飼料生産が長期間に亘るようになりました。

さて水稲の立毛中に燕麦或いはイタリアンライグラス、レンゲを播種し、稲刈後施肥して翌春に利用する栽培方法は簡単であり、起土碎土等の作業が不用ですので労力の節約にもなります。10月から11月始めにかけては普通稲、早植稲の刈取期ですが大体水稲の刈取期から逆算して20日~30日前に、水田を歩いて足跡がつき僅かに水がニジミ出る状態の時に燕麦、イタリアンライグラス、レンゲ等を播種するわけです。

皆さんがこれまで実行されているレンゲの播種と同じ要領でやればよいわけです。

燕麦やイタリアンライグラスが入って来ますと、春の飼料の数が多くなり利用期間も4月頃(暖地では3月頃)から6月初旬に亘って長くなります。

岡山畜産便り1959.10

第2表 降霜前後のツルの成分 (森本氏)

収穫月日	水分	粗蛋白質	粗脂肪	無可窒素物溶	粗繊維	粗灰分
11月10日	88.74 %	1.69 %	0.47 %	5.58 %	2.39 %	1.13 %
11月17日	85.14	2.19	0.59	7.09	3.47	1.51

備考 降霜日11月15日

畑作青刈麦類、ベッチの混播

普通9月に燕麦、ベッチを混播しますと、11月から12月の初旬にかけて1,000~1,500kg (10a当)位の青刈を利用出来、更に翌年4~5月に3,000kg位の青刈生産があります。

然し10月に入って播く場合は、年内の一番芽の刈取は無理の様です。ともあれ夏作玉蜀黍の跡或いは甘藷の収穫跡地等に今月播種しておきますと、翌春の5月頃に利用出来ます。

ただ此処で御注意願いたいのは、津山地方ですと10月中旬以降のベッチ混播は、不利だという事です。寒さのためにベッチの生育が悪く反面燕麦は生育がすすみますので、ベッチが圧倒されて混播の意義がなくなります。従ってベッチを除いて燕麦だけをお播きになった方がよいのではないかと考えています。栽培の要点は畦巾60cm位で、種子は10a当燕麦5kg内外(4~6升)を条播にします。ベッチ混播の場合(但し10月初旬播のとき)は燕麦2.5kgベッチ(コモンベッチ)5.5kgです。

基肥に厩肥を1,800kg、硫酸20~30kg、過石20~30kg、塩加15~20kg施用します。

品種は中南部では晩生の前進、ビクトリー等、中北部では岡山県が適当です。

なお県の北部は燕麦の作柄が不安定ですので普通にはライ麦をお奨めしたいと思います。

水田で水稻取跡地に燕麦を作る場合は、耕起、砕土、整地して同様の要領で播きます。

燕麦の成績

播種期	収穫期	生草収量	ベッチ割合	試験地
10月15日	① 5月13日	4,963kg	2.9%	農試津山分場
10月16日	② 6月2日	5,364kg	9.9%	酪農試

注 ① エンバク4升 ベッチ4升 昭和28年

② エンバク4升 ベッチ4升 昭和32年

畑作青刈ナタネ(レープ)の播種

早春の青刈用作物としては、イタリアンライグラス、レープがその主たるものです。出来うるならばこの両作物を半量ずつ組合して(配合して)給与するなら、栄養のバランスが取れた飼料となります。さてレープを9月に播きますと、年内一番刈が出来ますが、畑の都合では10月に入ってから播種も可能です。岡山県飼料作物研究会で作りました耕種基準によりますと、レープの播種適期は、南部中部で9月一杯、北部では9月中旬までとなっておりますが、県南の三徳塾で石橋、田中技師が試験された成績によりますと10月20日播で、翌春4月20日刈取の場合10a当、3,889kgの生産があがっておりますので、南部ではこれから播種されても可成りの生産があがります。

津山地方では、10月初旬播の4月中旬の刈取で3,300kg程度になり、表でみられますように著しい減収が認められます。従っておそくとも10月上旬までには播くことです。

栽培法は畦巾60cm、株間15cmの1本立とし、品種は合成ナタネ(Co)が普通に用いられています。しかし合成ナタネ(Co)には早生、中生、晩生の系統がありますので注意して入手することが肝要です。

なお3月上旬の刈取の場合にはみちのくなたね、東海5号、又、3月中旬では東海7号といった風に採実ナタネで茎葉の繁茂する品種もありますので利用時期を考えて品種、系統をえらぶことが大切です。

青刈ナタネの栽培で更に注意して頂きたいことは、窒素質肥料が欠乏しますと葉の収量が甚しく低下します。青刈燕麦の場合と同様の肥料設計が必要で、厩肥を十分に用いましょう。

レープの収量

	播種期	収穫期	収量(10アール)	備考
昭和28年	9月20日	4月20日	5,520kg	開花期
	10月4日	4月20日	4,320	開花期
	10月20日	4月20日	3,889	開花期
昭和32年	9月19日	4月15日	5,625	開花期
	10月3日	4月23日	3,420	開花期
	10月19日	4月23日	3,300	開花期

注 昭和28年は県農試(三徳塾)

昭和32年は県酪農試 品種 Co

岡山畜産便り1959.10

畑作水稲作跡のイタリアンライグラスの播種

イタリアンライグラスは冬期の厳寒時において刈取っても、充分再生します（昭和33年9月号畜産便り参照）ので冬期間の青草源として貴重なものです。但しこの目的のためには、少くとも津山地方では9月一杯に3～4回時期をおくらしして播種しておきますと、11月中旬から2月頃にかけて10a当り1,500～2,000kgの一番刈が出来ます。

しかし10月に入りますと生育がおちますのでむしろ翌年の3月頃からの利用を考えた方が得策です。播種期は県南部で11月中旬、中部で10月下旬、北部で10月上旬までが適期です。

10a当条播で（畦巾45cm）1～1.5kg、散播で2～2.5kgの種子をまきます。

肥料は基肥として青刈燕麦なみに準備し、その後刈取のたびに硫酸10kg位を追肥します。

牧草地に休暇を与えよう

牧草地の利用は、青刈作物のようにその年の一作で勝負をするのではなく、数年間に亘って利用するものです。従って前年の利用の仕方が当世流行のオーバーですと、牧草はノビテしまつて次の年には生産がおちます。特に県の中南部では夏の高温乾燥期が牧草の寿命を縮めようとネラッていますから、これを耐えうるように肥培管理しておかねばなりません。

従って秋の利用も牧草が青いからと云って何時までも続けしないで、越冬するに十分な養分の蓄積の余裕を与えてやろうではありませんか。降霜期に入るとき草丈が20～30cm位に伸びているのがよいのではないかと思います。